

## 後漢末軍閥考

—流民問題及び募兵制を中心に—

吉田 健太郎

第一章ではまず流民を考察する目的を明らかとする。本論は魏晉南北朝時代の特徴である「分裂の世」を生み出した原因を分析することを目的とする。「分裂の世」を引き起こした直接原因に西晉期に起こった八王の乱とそれに続く五胡の侵入が挙げられる。ただこれらの他に想定しうる原因に中国全土、特に華北地区での相対的な国力低下、言い換えると戸口の減少が指摘できる。五胡の勃興も五胡の総人口が増加したというよりも中国本土の人口が減少したことにより少数民族である五胡の台頭が起こったという側面があると思われる。そこで前代にあたる後漢期に顕著となる流民問題を考察し、流民がいかに「分裂の世」を引き起こす要因となるかを明らかにする。また合わせて後漢の兵制と流民問題との関連を主に後漢の軍勢徵厚方法の一つである募兵制より考察する。

第二章においては本稿の中心論題となる後漢の流民問題について論及する。まず後漢代に起こった諸反乱と流民の関係を考察する。多田狷介氏は後漢帝国の下降期を三段階に分けて考察、第一段階（一〇〇～一三〇）は羌人の反乱の長期化と災害の多発により流民・貧民が発生し反乱が生じたこと、第二段階（一三〇～一六〇）は華北へ物資を供

給することの負担による江淮地区への反乱の波及、第三段階（二六〇—一八四）はさらに南下し黄巾の乱に帰結する。反乱と流民の關係を見るため一四二年に一度反乱集団を解散しその後再度反乱を起こした張嬰の反乱の事例を考察し、その結果反乱原因は郡太守の収奪にあったこと、張嬰は再度反乱を起こしているが前回「数万」あった勢力が「数千」に減少しているがこれは広陵太守張綱の帰農政策により生業の復興がなされたためと考えられ反乱集団が多く流民・貧民層に依拠していたと考える。

次に後漢国家の流民対策の現状は上谷浩一氏・東晋次氏の見解より和帝・安帝期にかけて中央政府の積極的な地方政府への流民問題等の具体的な対策実行の強化がなされていたこと、しかしそれ以後外戚や宦官の専横や様々な立場の豪族の掣肘により地方行政が機能しなくなったことが指摘される。また戸口の虚偽登録がなされていたことから「後漢書」に散見する史料より後漢の総人口が五千万を推移していることがわかるが実質的には減少傾向にあったと考える。また戸口の虚偽登録分の諸税が他の戸籍登録者の負担になる可能性から流民化の長期継続が指摘でき、これが黄巾の乱の下地となったと考える。

次に後漢末軍閥と流民の關係においてまず後漢末軍閥が流民を軍隊供給源としている事例を挙げ流民の存在が戦乱の原因となること、地方行政機能の復興が軍閥諸勢力の拡大防止と流民の帰農にかかせないことを指摘する。

魏の移民政策において魏王朝建国当初もなお戸口把握状況が低かったこと、そのため魏の文帝曹丕は曹操の中原地区の戸口増加の政策を継承しより明確化していったこと、移民政策は移民費用や税免除等の経済的負担は軽視できないことを指摘する。

曹操と孫権の境界にあたる江淮地区で二一三年に十余万戸もの流民が発生しているがこの原因は移民の実行にあ

る。この移民の失敗事例と成功事例である魏蜀の境界での移民を比較検討した結果、江淮の事例では劉馥・陳登等の死去による有力地方官の欠如、曹操が行なった徐州での大虐殺、戸口登録者も屯田民に編入する態度への不安の三つの移民を阻害する要素があったこと、魏蜀での事例では張既・杜襲・楊阜等有力地方官の配置、強制屯田編入防止の浸透に求める。また両地区の状態の違いにも着目し江淮地区が多く自活しうる人民であったのに対し関中から漢にかけては董卓の長安遷都による洛陽住民の長安への移転に始まり董卓殘党の略奪や馬超・韓遂による反乱により多量の流民群が充満していたことを挙げ、ここから流民の軍閥への編入の容易さを指摘しこれからも流民が「分裂の世」を創出する要因と考えられる。

第三章においては第二章において論及した流民と後漢の兵制の関連を考察する。まず後漢光武帝の軍備縮小政策について考察し、この軍備縮小政策によって少なくとも後漢中期頃まで内郡において徴兵が行われない時期があること、浜口重国民の説く人民の兵役義務意識の薄れが大きな影響を及ぼした事、戸口把握の減少等の情勢下に募兵制が隆盛した要因を指摘する。

次に後漢の募兵について考察する。まず募兵の要素である賞賜について論及し募兵の支給金は邑ごとに払われていること、謝安の事例よりある程度集団を形成した者の募兵も行っていた事、その場合金銭のほか爵位や食邑が与えられる事を挙げる。また募兵軍は十分な賞賜が得られない場合「賊」化する危険性をもつ事、朱蓋の長期間の兵役についていたという事例から朱蓋の生活基盤が農業に求めることができなことから職業軍人であった可能性があること、募兵軍による常備兵の構成がなされた可能性があることを指摘する。賞賜不足の問題は当時の税収入の低下のほか西北方面の事例として上級軍人が扶持米を自己の懐に入れ末端まで到達しなかった事例をあげる。後漢の募兵軍の

集大成とも言える西園軍については数箇所の軍隊補強地を挙げその中で泰山・丹楊の募兵は自然環境が厳しいことにより精兵が得られることのほか流民の集合地である山に着目し穀物生産に従事する税役負担者である編戸の民に兵役を課すことを避ける必要上、山に集まる流民を募兵の対象としたことを指摘する。

次に後漢末軍閥の軍勢徴集について考察する。軍勢徴集方法として劉表の場合江南で勢いがさかんだった宗賊を招き寄せ騙し討ちにしてその軍勢を吸収している。曹操の初期の軍勢徴集は多く募兵を行っておりその募兵地に西園軍と同様に丹楊を選んでいる。その他後漢末軍閥の軍勢徴集を鑑みただけで考察してきただけ穀物生産に従事するものへの兵役負担の回避が共通点として挙げられる。ただ曹操においては徴兵が行なわれていたことが指摘されている。その徴兵の事例を考察した結果全て二〇四年以降のことでありこれは屯田経営の発展による穀物生産量の増大により軍事力強化に力を注ぐことが可能になったためと考える。

第四章においていままで考察してきたことのとめと魏晋期の情勢を展望する。後漢王朝にとって流民の発生は収入の減少や反乱等の社会不安を醸成するもので否定的な現象であるのに対し後漢末軍閥等の新興勢力にとって流民は軍事・生産の両面にわたり活躍しその編入も編戸の民に比べ容易で兵士・穀物生産者とその加工も楽に行える点では軍閥にとって肯定的に捉え得る存在である。ここに流民が王朝の衰退と「分裂の世」を引き起こす要因であると結論づける。

後漢の兵制と流民との関連において流民発生による戸口の減少に募兵制の隆盛の原因としたが逆に王朝における徴兵制の運行は王朝の国力の安定の指標とも言える。

最後に三国時代を各国境線上を除き比較的安定した時代ともとらえられるが蜀及び呉の滅亡当時の人口と後漢時の

人口を比べると蜀・呉の人口の減少が目につく。これは三国の鼎立が戦時の状況で軍隊維持等の様々な軍事費の負担によって中国の国力が復興している時代とは言い難い。魏を継ぎ中国を統一した西晋は後漢における光武帝・明帝・章帝三代の如くしばらくの復旧期間を設定する必要があったがまもなく起こった八王の乱により中国の国力が低下したまま五胡の侵入を蒙り長期の「分裂の世」を現出させたと考える。